

令和5年度 秋田県立矢島高等学校
第3回学校運営協議会 議事録

【日時・場所】

令和6年2月20日（火）

13:15～13:55 各ワーキング・グループ協議（小・大会議室）

14:00～16:00 学校運営協議会（大会議室）

【出席者】

（1）学校運営協議会委員

大井 永吉 【天寿酒造株式会社代表取締役社長】
庄司 嘉政 【矢島高等学校元PTA会長】
佐々木正純 【矢島体育協会会長、法華宗寿慶寺住職】
茂木 雅人 【本海流坂之下番学講中】
佐藤 俊弘 【矢島高校拓道同窓会会長】
三浦 秀人 【矢島まちづくり協議会会長】
佐藤 俊弥 【矢島まちづくり協議会元委員、鳥海高原花立牧場代表理事】
滝野由紀夫 【元由利本荘市役所矢島総合支所長】
大庭 良久 【矢島小学校校長】
東海林俊介 【矢島中学校校長】
佐藤 由香 【矢島高等学校PTA会長】
武蔵 美佳 【矢島高等学校校長】

（2）矢島高等学校〔事務局〕

淀谷 誠也 【教頭】
丸山 隆 【事務長】
高橋 晃二 【教諭（総務部主任・WG1委員長）】
佐藤 久男 【教諭（教務部主任・WG3委員長）】
鎌田 勉 【教諭（生徒指導主事・WG2委員長）】
片桐 博美 【教諭（特別活動部主任）】
黒木 仁美 【養護教諭（保健主事）】
土田 伸也 【教諭（商業科主任・YBP担当・特別活動部副主任）】
その他 各ワーキング・グループメンバー教職員8名

【次 第】

開会（事務局：教頭）

1 校長あいさつ

学校の状況として、3年生14名全員が進路を決定することができた。進学が5名、就職が9名である。進学は、高等看護学校1名、その他専門学校4名となっている。就職は、県内6名、県外2名、自衛隊1名となっている。委員の皆様を始め、多くの方々に御支援、御協力をいただき深く感謝したい。

今回の学校評価アンケートの中に、子供を矢島高校に入学させてよかったか、という問いがあるが、保護者43名の内40名が、そう思う、どちらかと言えばそう思うと回答している。本校は小規模校だが、だからこそ今後も生徒一人一人の適正や能力に応じたきめ細かな学習指導、生徒指導を行っていきたいと思っている。

部活動においては、吹奏楽部が全日本吹奏楽コンクール秋田県中央大会中高合同の部で銀賞、美術部の生徒が秋田県美術展覧会入選という成績を残している。その他2年生と3年生のビジネス系の生徒たちが、秋田県高等学校生徒商業研究発表大会で準優勝、そして東北各県2校参加の東北大会では6位入賞を果たし、秋田県勢の入賞は13年ぶりということで本校職員も大変喜んでいる。

令和6年度の入試に関して、1次募集の出願者数は昨年度は12名だったが、今年度は21名の出願があった。入学者数の確保は本校の大きな課題だが、矢島高校の良さをこれまで以上にアピールしていかなければならないと考えている。

本日の配付資料に矢島保育園、矢島小中学校との連携に関する資料がある。今年度新たに行った事業として、9月に中高連携講演会を開催した。鶴の湯温泉代表取締役会長 佐藤和志 氏を講師として、中高の生徒全員が講演を聴いた。

また、12月からこれまでの中高連携推進委員会に小学校も加え、小中高連携推進委員会として、小中高の連携のあり方について検討を進めている。令和6年4月から校舎一体型の小中高連携校がスタートするが、全国的にも注目されることが予想される。本日は活発な意見交換をお願いしたい。

2 学校運営協議会会長あいさつ

この学校運営協議会は、WGの協議内容を中心として進めてきたが、どうしたら矢島高校を選んでもらえるか、学校存続のための生徒の確保ということである。いろいろな意見が出されている。そもそも、この地域の子どもの数、人口数が急激に減っている状況が大きな問題となっている。

そのような中で、新年度の矢島高校の出願者数が昨年度より増えているということは、すごいことだと考える。他校の出願者数が減っている状況で増加した理

由を探ることも重要だと考える。

今回は学校評価が議題となっているが、全員でしっかり議論していきたいので、よろしく願いしたい。

3 出席者紹介（事務局：教頭）

4 協議（進行：大井会長）

（1）協議 1 学校評価

①学校評価アンケート結果について

資料（「令和5年度学校評価分析」、「学校評価（集計結果）」）に基づき、教頭が説明。

※質問・意見

委員（佐々木）：保護者の回答で、「矢島高校に入学させてよかった」という反面の少数の意見はどのような内容か。

教頭：数値的には、「あまりそう思わない」が1名いる。保護者の自由記述に関連する記述があるが、回答者と同一者とは断定できない。

校長：同一者である可能性は高いが100%そうだとはいえない。記述内容に関しては、アンケートを行った時期にクラス内の人間関係に悩んだいた生徒に関係するものと考えている。現在は改善してきているが、教員側もこのような意見に真摯に取り組んでいる。

委員（庄司）：少数でも否定的な回答は重要と考えるが、そのような回答の理由内容を把握できるようにしているか。

校長：必ずしも低評価の意見とは限らないが、自由記述として、評価が「全くそう思わない」、「あまりそう思わない」と回答した方の意見をいただくようにしている。

委員（茂木）：職員側で、保護者への働きかけの部分に関する評価が低いが、保護者側ではそれほど低評価でないように思えるが、そのあたりのギャップについては学校としてどう捉えているのか。職員側の自己評価が厳しすぎる、あるいは弱い部分と考えているためかもしれないが、保護者側との過不足のない評価が必要と考える。

校長：職員の回答人数が少ないため、1人の回答が数値に影響する程度が大きいこともあるが、ご指摘の「保護者への分かりやすい教育方針・活動の伝え方」については、職員側が自己に厳しく、さらに進めていこうという気持ちの表れだと個人的には捉えている。「保護者との連携による欠席・遅効の防止徹底」の評価についても、特定の遅刻者がおり、さらに保護者との連携に努める思いと捉えられる。

委員（大井会長）：委員側も評価の集計結果や分析結果で判断するしかないため、数値の理由等について分からない部分がある。学校側からの分かりやすい説明をお願いしたい。

委員（佐藤俊弘）：学校評価は保護者と職員の評価であるが、生徒が来たがる学校というものが一番重要だと考えるので、生徒へのアンケートも必要ではないかと考えるがいかがか。

校長：生徒へは、授業アンケートを行っており、それぞれの教科について生徒がどう感じているのか、あるいは自分の取り組みはどうかということを生徒自身が自己評価し、教員側もそれにより授業改善等に役立てている。その他にもキャリア教育CAN-DOリストという自己評価を年3回行っており、機会があればお示ししたい。また、様々な行事の後にもアンケートを実施しており、今後も改善や成長に役立てていきたいと考えている。

委員（庄司）：学校評価の集計結果は、生徒等に公表しているのか。

校長：毎年度、学校のHPに掲載している。自由記述の部分については示していないが、今後、何らかの形でフィードバックしたいと考えている。

②各分掌の取組について

資料（「令和5年度分掌経営評価シート（年度末自己評価一覧）」）に基づき、分掌の取組内容や自己評価について各分掌主任が説明。

※質問・意見

委員（庄司）：体験入学に来た生徒は何人か。

教務（佐藤）：21名である。

委員（庄司）：出身中学校の内訳はどうなっているか。

教務（佐々木）：矢島中10名、鳥海中3名、それ以外旧本荘市内7名、秋田市1名である。

委員（庄司）：地元の参加者が多いのが志願者数の増加に繋がっていると思う。体験入学の案内はどのようにしているのか。開催期日を案内するだけか。

教務（佐藤）：体験授業や学校説明の内容等を由利本荘市、にかほ市内の全中学校に通知している他、学校のHPにも掲載している。

委員（庄司）：秋田市からの参加者はどうやって知ったのか。

教務（佐藤）：参加理由等は問わないため不明だが、事前に問い合わせがあった参加可能であることを伝えた。

委員（佐々木）：2年部、3年部の自己評価が厳しい印象を受けた。過去の事案も含めて、卒業間際まで進路が決まらない生徒がいたかどうか。就職

後、3年程度で離職する生徒がいたかどうかについて教えてほしい。

校長：過去には卒業ギリギリまで進学か就職か決まらない生徒もいたが、最近では3年間の中で進学、就職を決めている生徒がほとんどである。毎年ではないが就職後に離職する生徒は若干いる。就職する職業、企業についての適切な進路指導については、学校側の課題の一つでもある。

進路（佐藤）：本校では卒業間際まで進路が決まらない生徒はほとんどいない。離職については、最近のデータで高卒3年で離職する割合は37%ということだが、本校に関しては県外就職で離職しやすい印象はある。ハローワークの情報としてこの地区全般が全国平均より遙かに低く、定着率がよい現状である。

委員（大井会長）：1、2年部の説明で、中学校で不登校だった生徒へは全員で支援し、高校では通学できているという理解でよいか。同時に進学を目指しているような生徒へはどのような支援をしているのか。

2学年（佐藤）：不登校ぎみの生徒に対しては、学年部で毎朝、身体の状態だけでなく心の状態を確認できるようなチェック方法を工夫している。状態が悪そうな場合は、その日の内に本人と丁寧に話をし、問題が大きくなる前に対応するようにして、生徒が学校に来やすいようにしている。学習面でもいろいろな課題を抱えている生徒がいるので、校内で特別支援委員会を開催して、生徒ごとに配慮が必要なことを全職員で情報共有して指導している。

1学年（月本）：中学時代に保健室登校など様々な課題を抱えている生徒もいるが、遅刻気味でも通学ができています。職員が全員で声かけ対話等で協力し、本人の自己評価もよい状態になっている。

校長：高い目標を持って進学を希望している生徒に対しては、学年部、進路指導部が連携して個別指導を強化し、早期に受験対策等の指導をするようにしている。

委員（庄司）：2年部の説明に他者を思いやれない、コミュニケーションがとれない傾向について説明があったが、これから社会に出たら多くの人間と関わることになる。それに対する具体的な取組等あるか。

2年部（佐藤）：つい最近もハローワークに依頼し、適性検査や興味関心検査などを希望者に行い、自分自身の長所短所等を客観的に分析する取組や、スクールカウンセラーと協力した粘り強い指導等も行っている。

委員（庄司）：自社でもコミュニケーションがとれないで離職する例もある。卒業までしっかり指導してほしい。

(2) 協議2 次年度に向けて

①各WGの今年度の成果と課題、次年度の取組について

各WG委員長より報告

※質問・意見

委員（茂木）：挨拶運動について、来年度から小学校も含めて実施することを想定しているということだが、実施場所はどのようになるのか。

WG1（高橋）：WGの協議では、県道から入って校舎に向かう直線道までは一緒なので、校舎との突き当たり付近がよいのではとの意見があった。

委員（庄司）：鳥海山登山について、特別活動部での報告でもあったが、頂上まで行けた生徒、目標途中で下山してしまう生徒の状況はどうか。

校長：今年度は本部待機の生徒を含め全員が参加しており、43名が登山を行っている。その内、6名が頂上に到達した。

特活（片桐）：8合目までは大丈夫だろうと目標にしても、登山を甘く考えていたり、自分の体力を把握できていないなどで、途中で脱落してしまう生徒がいる。実施後の職員アンケートには、5合目付近での散策コースの設定案もでている。

委員（庄司）：自分も以前、鳥海山登山に参加して途中下山する生徒の付き添いを手伝ったことがあるが、脱落する生徒が多い場合は、ボランティアの募集も必要ではないか。

校長：生徒には登山前の目標として、頂上、8合目、6合目を選択をさせているが、目標設定が高すぎ、実際の登山では体力不足で7合目あたりで断念して下山する生徒達があった。外部からは、矢島総合支所長のご協力や矢島山岳会の支援、医師、看護師、研修医の支援など、毎年多くの方々のご協力を得ながら鳥海山登山を実施している。職員だけでは実施できない行事なので、今後も外部の協力を得ながら継続していきたいと考えている。

委員（大井会長）：多くの方々の協力がある行事であり、生徒達にはしっかりした動機付けをお願いしたい。また、登山行事であるので散策コースの設定はそぐわないと感じる。

委員（佐藤俊弥）：高校生達のがんばっている活動を伺い、地元で若者が目に見えて減ってきている課題に関して、もっと魅力ある活動を情報発信していかなければならないと改めて感じる事ができた。

委員（滝野）：WGの活動に関連して、生徒達にこの地域を好きになってもらうには、体験することが一番だと考える。これまでの活動をさらに掘り下げながら継続して、生徒自身が体験できてよかったと感じ、将来的にこの地域に残ってもらえるようになることを期待している。

② 次年度の学校の取組について

資料（「令和6年度 学校運営協議会年間計画（案）」）に基づき、教頭が説明。

※質問・意見

委員（三浦）：以前、保護者アンケートで高校給食の実施希望に関するものがあったが、その後の状況はどうか。

校長：いろいろとクリアしなければならない問題があり、現在保留となっている。市教委側と継続して検討することとしているが、来年度の実施は困難であり、今後、小中高の生徒数の推移を見ながら検討し、現状では令和8年度以降になると考えている。

事務長：現在の中学校の給食施設を利用して、小学校の給食も提供することになるが設備面や供給能力の関係から、現状では高校へ給食を提供する余剰を見込めないとする市教委側の判断である。

校長：今後、小中学校の児童生徒数が減少していけば実施できる可能性があるという状況である。

委員（東海林）：羽後高校の例があるが、羽後町の中の1高校の例になる。由利本荘市の場合は他の高校もあるということも問題になると考える。

校長：そのような問題や物価上昇のため、保護者アンケート時と1食単価が値上がりしているということも予想される。

委員（東海林）：不登校児童生徒の増加は小中学校でも大きな問題だが、矢島高校の教職員が生徒に寄り添い、自己有用感や自己肯定感を高めていく姿勢は大変すばらしく、小規模校ながら入ってよかったと思える学校ではないかと考える。

委員（大庭）：令和6年度より小中高一体型の校舎となり小中高の連携が検討されている。1年目からすぐに様々な連携活動ができるということではないかもしれないが、時間をかけ、それぞれでできることを考えていくことで、この地域の活性化にも繋がっていければと考えている。

5 校長あいさつ

※校長より、学校運営委員への感謝と次年度の委員の取扱等を説明をする。

6 諸連絡

「学校評価用紙」の提出について

「学校運営協議会に係るアンケート」の提出について

閉会（事務局：教頭）